

心に残ったエピソード

「心に残ったエピソード」とのテーマをいただき、自分の歩んできた看護師人生を振り返る時間を持つことができました。看護学生の時の受け持ちの患者さんから臨床を終えるまで関わった多くの患者さんが思い浮かんできました。その方たち以上に多くの患者さんたちとの関わりがあり、多くのことを学ばせていただきました。看護教員の会話しながらの介助により、あっという間に座位となれた術後の不安から動けずにいた若い女性、10～15cmもの大きな褥瘡が3つもできていた80代の女性、亡くなる直前まで手鏡を手放さなかった50代の大腸がんの女性、末期の胃がんで胃管や点滴チューブにつなぐ「自分は何も悪いことをしていないのに何故こんなに苦しмаなくてはならないのか」と発していた中年の男性、新人看護師が入職してくると「注射の練習をしろ…」と上肢を差し出してくれた70代の男性、夜じゅう背部のタッピングを続け午前中の胸部レントゲンの結果を待つ小児……。

多くの患者さんたちとともにそのご家族の方々との関わりも多くあった。泌尿器系の癌で末期のご主人に付き添い、夜間になるとそばで死装束を縫っていた妻。呼吸器につなぐれ意識のわからない娘の名を呼び続ける70代の母もいました。やはり夫が泌尿器系の癌になり治療を受けていた妻は、来るたびごとに将来の不安を口に出していた。臨床を離れた後銀座線のホームで「師長さん」と呼び止められ、娘さんが看護系大学に入学したことを嬉しそうに話してくれた。市内のスーパーで買い物をしていた時には、「何も悪いことをしていないのに…」と話していた患者さんの妻に「〇〇の看護師さんですよ」と話しかけられ、当時中学生だった長男が独り立ちされたことを教えてくださった。その後も時々お会いする機会があり、当時若くして未亡人になられた方たち同志がランチと称して集まり、いろいろと自分たちのことを話し合い、お互いに悩みを打ち明けあい苦しい時を乗り越えてきたことを知った。また、その会話の中には当時の看護師の評価も含まれていたようであった。

新病棟の開棟にも関わった。開棟初日から入院がありその後も多くの患者さんやご家族の方々に接し、退院指導等もしてきているはずであったが、記憶に残っている方々は非常に少ない。その時期に多くの看護職が退職をしていったことは今でも胸が痛む。私が臨床にいた時期は、入院期間が長く患者さんともご家族の方々とも多くの時間を共有することができた時代であった。入院期間が短縮されている今日、患者さんやご家族とのエピソードにも随分と違いができてくるのではないだろうか。

今回、このようなテーマをいただくことにより改めて自分の看護師としての振り返りができました。機会をくださった広報委員の皆様には感謝申し上げます。

会長 宮本律子

起き上がりこぼし（勇気がでた出来事）

起き上がり小法師（おきあがりこぼし）は会津を代表する縁起物で、転んでもすぐに立ち上がるころから、粘り強さと健康のシンボルとして縁起がいいとされています。毎年初市で家族の人数より1個多く買う習わしがあり、会津の家庭には欠かせない縁起物になっています。

～以下本文です～

30代半ばで突然の病棟から手術室への異動!

当然だが手術室では、解剖整理、術式、手術機械名、手術手順など様々なことを覚える必要がある。手術室での情報量の多さに頭がついていけず、久しぶりに大学ノートを購入して、マイノートを作成した記憶がある。当時の手術室では、異動して最初に実践するのが帝王切開の直接介助であった。（しかも異動後3日目!）手術前までは手術器械名や手術手順を覚えていたが、いざ始まったら手術のスピードに全くついていけず、頭の中は真っ白になり器械出しはお手玉状態! 医師からは「器械出し看護師誰かに代われ!」と言われ悔しい思いをした。そんな時、心の支えになったのがプリセプター（同期入職者）と当時の手術スタッフである。プリセプターは同期ということもあり、なんでも相談に乗ってくれ、失敗をしても周りのスタッフが一緒に支援し支えてくれた。あの時は本当に辛かったが、なんとか乗り越えて今も看護師を続けられているのは、当時の手術室スタッフの支援があったからこそだと思う。

JCHOうつのみや病院 蕪木亨有